

直江廣治先生業績目録

(1) 編 著 書

屋敷神の研究 — 日本信仰伝承論 —	吉川弘文館	昭和四一年三月
中国の民俗学	岩崎美術社	昭和四二年三月
祭りと年中行事	桜楓社	昭和五五年一月
民間信仰の比較研究	吉川弘文館	昭和六三年八月
民俗学辞典	東京堂	昭和二六年一月
年中行事図説	岩崎書店	昭和二八年六月
日本民俗図録	朝日新聞社	昭和三〇年四月
総合日本民俗語彙	平凡社	昭和三〇年六月 ～三七年四月
日本民俗事典	弘文堂	昭和四七年二月
日本子どもの歴史 第三・四巻	第一法規	昭和五二年八・一〇月
稲荷信仰	雄山閣出版	昭和五八年

(2) 論 文 (日本関係)

板取雑記	民間伝承	五巻八号	民間伝承の会	昭和十五年五月
赤児と石其他	民間伝承	六巻八号	民間伝承の会	昭和十六年五月
日本人の議論の仕方	教育改造	十二号	成城教育研究所	昭和二三年二月
村の労働倫理	社会と学校	二巻二号	教育社会学会	昭和二三年二月
民俗学に於ける帰納法と演繹法	高志路	新五号	新潟県民俗学会	昭和二三年五月
熊野路の現状	民間伝承	十二巻八・九、 十一・十二号	民間伝承の会	昭和二三年八・九、 十一・十二月
村の生活と労働	民俗学の話		共同出版社	昭和二四年七月
民俗学	科学年鑑	三輯	北隆館	昭和二四年十月
熊野の垣内	民間伝承	十三巻十号	日本民俗学会	昭和二四年十月
十津川の垣内	民間伝承	十三巻十一号	日本民俗学会	昭和二四年十一月
Post War Folklore Research Work in Japan	Folklore Studies	Vol. VII	NANZAN ANTH- ROPOLOGICAL INSTITUTE	1949
社会科と郷土研究	社会科時報	一卷	日本社会科研究会	昭和二五年四月
八月十五夜考	民間伝承	十四巻八号	日本民俗学会	昭和二五年八月
カド小考	民間伝承	十四巻八号	日本民俗学会	昭和二五年十月
昔話研究のために	民間伝承	十四巻十二号	日本民俗学会	昭和二五年十二月
天草御所浦のヤコ騒動	民間伝承	十五巻七号	日本民俗学会	昭和二六年七月
労働慣行	民間伝承	十五巻十二号	日本民俗学会	昭和二六年十二月
隠岐島	民間伝承	十六巻三号	日本民俗学会	昭和二七年三月
屋敷神	民間伝承	十六巻十号	日本民俗学会	昭和二七年十月
対馬の労働慣行	人類科学	四集	九学会連合	昭和二七年十月
民俗学から歴史教育へ	歴史教育講座	一卷	誠文堂新光社	昭和二八年十一月

陸前十五浜のイジナ	山陰民俗	三号	山陰民俗学会	昭和二九年九月
衣食住、婚姻、葬式	明治文化史	十三卷	洋々社	昭和二九年九月
屋敷神、昔話	民俗学手帖		古今書院	昭和二九年十月
日本人の生活の秩序	日本人		毎日新聞社	昭和二九年十二月
対馬の地主様	日本民俗学	二巻四号	日本民俗学会	昭和三〇年三月
労働と衣食住	日本文化史講座	六巻	評論社	昭和三〇年十月
隠岐の民俗	日本文化風土記	六巻	河出書房	昭和三〇年十二月
地神と荒神	日本民俗学	三巻三・四号	日本民俗学会	昭和三一年一月
ことわざ	日本文学講座	三巻	東大出版会	昭和三二年四月
郷土研究と歴史教育	月刊社会科	一卷十二号	東京教育研究所	昭和三二年八月
五箇村久見の民俗	山陰民俗	十五号	山陰民俗学会	昭和三二年十一月
The Worship of Iigami and Kōjin	研究論文集	九巻	文学・哲学・史学 学会連合	昭和三三年二月
垣内の研究 その一	史学研究	三号	東京教育大学文学部	昭和三三年三月
垣内の研究 その二	史学研究	五号	東京教育大学文学部	昭和三五年三月
民俗学の動向	人類科学	十二号	九学会連合	昭和三五年三月
国東半島の御田植祭・年中行事	くにさき		吉川弘文館	昭和三五年三月
祭りと競技	民俗文学講座	三巻	弘文堂	昭和三五年六月
民俗学に志すまで—民俗学と私 1	東京教育大学 民俗研究会会報	一号	東京教育大学民俗 研究会	昭和三五年十月
首途の頃—民俗学と私 2	東京教育大学 民俗研究会会報	二号	東京教育大学民俗 研究会	昭和三六年一月
屋敷神	宇和地帯の民俗		吉川弘文館	昭和三六年三月
北京時代—民俗学と私 3	東京教育大学 民俗研究会会報	四号	東京教育大学民俗 研究会	昭和三六年十二月
森神信仰	西石見の民俗		吉川弘文館	昭和三七年三月
親乗山根源記・禊祭	日本人物語		毎日新聞社	昭和三七年三月
屋敷神の性格	史学研究	八号	東京教育大学文学部	昭和三八年三月
荒神信仰・屋敷神	美作の民俗		吉川弘文館	昭和三八年三月
家の神と部落の神	淡路島の民俗		吉川弘文館	昭和三九年三月
辰と巳—十干十二支について	高校通信国語	二七号	東京書籍	昭和三九年十二月
イトウと家の神の信仰	志摩の民俗		吉川弘文館	昭和四〇年三月
屋敷神の祭場	日本民俗学会報	三九号	日本民俗学会	昭和四〇年五月
丙午の話	高校通信国語	三八号	東京書籍	昭和四〇年十二月
ニソの森信仰とその基盤	若狭の民俗		吉川弘文館	昭和四一年三月
民俗資料の記録と整理	新発田郷土誌	五号	新発田市史編纂委員会	昭和四一年七月
A Study of the Religious Tradition in Japan	Studies in Japanese Folklore		Indiana Univ.Press	1966
宗教—民間宗教	国文学	十一巻十二号	学燈社	昭和四一年十月
久見の民俗	離島生活の研究		集英社	昭和四一年十月
敷地軍記—(永沢正好と連名)	伝承文学研究	八	伝承文学研究会	昭和四一年十一月
利根川流域の民俗	人類科学	十九集	九学会連合	昭和四二年三月
郷土と歴史	史談	十三号	立正大学史科自治会	昭和四二年五月
南北朝期の民間信仰	日本歴史シリーズ	七	世界文化社	昭和四二年五月
怨霊のたたり	日本歴史シリーズ	三	世界文化社	昭和四二年九月

敷地軍記二 (永沢正好と連名)	伝承文学研究	九	伝承文学研究会	昭和四二年九月
稲荷信仰普及の民俗的基盤	朱	四号	伏見稲荷	昭和四三年四月
ウチガミ信仰	陸前北部の民俗		吉川弘文館	昭和四四年三月
信仰総説	日本民俗資料事典		第一法規	昭和四四年七月
年中行事	日本生活歳時記		社会思想社	昭和四四年十二月
稲荷信仰	津軽の民俗		吉川弘文館	昭和四五年三月
利根川流域における水神信仰	人類科学	二二集	九学会連合	昭和四五年三月
アメリカの民俗学入門書にみる昔話研究	口承文芸研究通信	月報五号	三弥井書店	昭和四五年六月
利根川流域の水神信仰	利根川一自然文化・社会		九学会連合	昭和四六年三月
沖縄の聖地信仰	南島の民俗		東京教育大学民俗学研究室	昭和四六年十一月
日本の婚礼	日本の民謡		国立劇場	昭和四七年八月
昔話と伝説について	勝田市史資料	十	勝田市史編纂委員会	昭和四九年三月
民俗慣行としての離婚	海外事情	二三卷八号	海外事情研究所	昭和五〇年八月
水神信仰と川	自然と文化	夏季号	観光資源保護財団	昭和五一年
生業、労働の諸相	日本民俗学の視点		日本書籍	昭和五一年十月
幼少年期における通過儀礼 (一) (二) (三)	教育研究	三二卷 一・二・三号	筑波大学付属小学校 初等教育研究会	昭和五二年 一, 二, 三月
人生儀礼から見た日本人論	伝統と未来		八戸市教育委員会	昭和五二年三月
江戸時代の稲荷信仰	歴史公論	三卷九号	雄山閣	昭和五二年九月
平戸諸島の荒神信仰	平戸諸島の民俗		東京教育大学民俗学 研究室	昭和五三年三月
子どもの日のルーツを探ぐる	学校経営	二三卷五号	第一法規	昭和五三年五月
民俗学と歴史教育	中学社会	二二〇号	東京書籍	昭和五三年十二月
菅江真澄と鳥追い行事	菅江真澄全集月報	十一	未来社	昭和五四年七月
教育の民俗	自由裁量 一ゆとりと充実 を求めて一		泰流社	昭和五四年七月
田の神と稲荷	日本の民俗宗教	三卷	弘文堂	昭和五四年九月
屋敷神	講座日本の民俗	四卷	有精堂	昭和五四年十月
包む文化	インベリアル	三二〇号	帝国ホテル	昭和五五年春
教育民俗学の構想 (一) (二)	教育研究	三六卷一・二号	筑波大学付属小学校 初等教育研究会	昭和五六年二月

(3) 論文 (アジア関係)

山西の習俗	地理学	十卷十号	古今書院	昭和十七年十月
山西村落に文化を運ぶ人々	北支	四一号	第一書房	昭和十七年十月
水滸城 — 華北の民譚 —	北支	四三号	第一書房	昭和十七年十二月
猴娃娃 — 中国の民譚 —	北支	四五号	第一書房	昭和十八年二月
北京東郊民俗聞書	ひだびと	十一卷十号	飛騨考古土俗学会	昭和十八年十月
北支民俗通信	民俗台湾	三卷十二号	東都書籍	昭和十八年十二月

田螺精 一中国の民譚一	北電	六卷七号	華北電信電話株式会社	昭和十九年七月
靈童出現譚	月刊毎日	七月号		昭和二十年七月
華北村落の伝承運搬者	中国評論	二卷一号	日本評論社	昭和二十二年一月
中国の家	日本歴史	二卷二十号	日本歴史学会	昭和二十二年二月
中国の宗教制度について	中国研究	一号	現代中国学会	昭和二十二年七月
中国民俗学の発展	歴史評論	三卷二号	春秋社	昭和二十三年二月
中国民俗学研究の近況	史学	二三卷二号	三田史学会	昭和二十三年六月
葫蘆人の誕生	国民の歴史	二卷七号	実業之日本社	昭和二十三年七月
中国の祈雨習俗	近代中国の社会と経済		刀江書院	昭和二十六年五月
中国の年中行事	世界歴史辞典	十五卷	平凡社	昭和二十八年四月
禹に関する伝承の一考察	東洋史学論集	三輯	不味堂	昭和二十九年十一月
中国の歳末情景	中国語	十一、十二月号	邦光書房	昭和三十年十二月
民俗週刊	民話	十号	民話の会	昭和三四四年七月
朝の点心	中国菜	創刊号	書籍文物流通会	昭和三五八年八月
中国の門神像	風俗	二卷四号	日本風俗史学会	昭和三七七年十二月
中国 一稲作の行事	食生活	五八卷十号	国民栄養協会	昭和三九年十月
古代中国人の世界観と人生観	講座社会と倫理	三卷	日本評論社	昭和四十年十二月
中国の民間信仰	中国文化叢書	十卷	大修館	昭和四三年七月
十五夜と中秋節	中国語	二五号	大修館	昭和四四年八月
北京時代の奥野さん	三田評論	七〇四号	慶応義塾	昭和四六年五月
台湾における民間祭祀団体神明会について	日本民族学会 年会第十一会研究 大会研究抄録		日本民族学会	昭和四七年五月
祭典の基本的要素	民俗学の方角		円光大学校民俗学 研究所	昭和四七年九月
台湾における神託の諸形式につて	日本道教学会 第三三大会 要旨		日本道教学会	昭和四七年一月
東アジア文化圏について	総合歴史教育	九号	総合歴史教育研究会	昭和四八年七月
台湾漢人社会における廟の成立過程について	日本民族学会 第十三会研究 大会抄録		日本民族学会	昭和四九年五月
道教と民間信仰	東書国語	一四二号	東京書籍	昭和五十年六月
民間信仰 一民衆と神々一	アジア学の 展開のために		創樹社	昭和五十年九月
台湾漢人社会における法師の法術について	第二九会日本民 族学会・日本人 類学会連合大会 抄録		連合大会	昭和五十年十一月
線香の効用	大法輪	四三卷五号	大法輪閣	昭和五一年五月
中国・台湾・韓国における民俗学の展開	日本民俗学講座	五卷	朝倉書店	昭和五一年十月
シンガポールにおける漢人社会の民間信仰	日本民族学会 第十七会研究 大会抄録		日本民族学会	昭和五三年五月

台湾漢人社会における神像の開光点眼儀礼について	第三二回日本民族学会・日本人類学会連合大会抄録	連合大会	昭和五三年十一月
日中説話の比較	東アジア民族説話の比較研究	桜楓社	昭和五三年二月
マレーシア華人社会における地縁的・業縁的・血縁的団体の組織・機能ならびにその信仰的基盤について	東南アジア華人社会の宗教文化	耕土社	昭和五六年四月

(4) 書評, 書誌紹介

中村 康隆：晴より曇への転化	民間伝承	五卷九号	民間伝承の会	昭和十五年六月
関 啓吾：猿蟹雑記	民間伝承	五卷十二号	民間伝承の会	昭和十五年九月
中市 謙三：青森県に於ける民間伝承としての靈魂の崇拜	民間伝承	五卷十二号	民間伝承の会	昭和十五年九月
顯 頤剛：古史辨自序 (平岡武夫訳)	民間伝承	六卷一号	民間伝承の会	昭和十五年十月
林 蘭：雷売りの董仙人 (呉守禮訳)	民間伝承	六卷一号	民間伝承の会	昭和十五年十月
河合栄治郎：学生と日本	民間伝承	六卷一号	民間伝承の会	昭和十五年十月
金関 丈夫：説話に就いて	民間伝承	六卷六号	民間伝承の会	昭和十六年三月
倉田 一郎：常民の哲学	民間伝承	十二卷三・四号	民間伝承の会	昭和二三年四月
中村治兵衛：近畿一米作農村の家庭構成	民間伝承	十二卷三・四号	民間伝承の会	昭和二三年四月
倉田 一郎：現代生活の論理について	民間伝承	十二卷三・四号	民間伝承の会	昭和二三年四月
古島 敏雄：田植農法出現の歴史的基盤	民間伝承	十二卷三・四号	民間伝承の会	昭和二三年四月
児玉 幸多：江戸時代の農民生活	民間伝承	十二卷五・六号	民間伝承の会	昭和二三年六月
農林省農業総合研究所編：農業総合研究二—二	民間伝承	十二卷五・六号	民間伝承の会	昭和二三年六月
宮本 常一：甘藷の歴史	日本民俗学会報	二九号	日本民俗学会	昭和三八年七月
岩田 慶治：日本文化のふるさと — 東南アジアの稲作民族を たずねて —	民俗学評論	一号	大塚民俗学会	昭和四二年二月

(5) 座 談 会

コミュニケーションの変貌をさぐる (直江廣治・佐藤毅・斎藤美津子・松原治郎)	言語生活	二二六号	筑摩書房	昭和四五年七月
鼎談・性の民俗を再検討する (直江廣治・今野円輔・森秀人)	伝統と現代	八号	伝統と現代社	昭和四八年六月
柳田民俗学と朝鮮 (直江廣治・桜井徳太郎・武田旦・佐藤信行・崔仁鶴・谷川健一)	季刊柳田国男研究	二号	白鯨社	昭和四八年六月

直江君を偲ぶ

窪 徳忠*

たしか一九七一年度から始まった九学会連合の沖縄県地方の総合調査のことだったと記憶しているが、たまたま直江広治君とバスで同車したことがあった。雑談をしたり、調査の成果について話しあったりしているうちに、バスは石垣市名蔵の近くを通過した。すると直江君が、「窪さん、いつか名蔵の調査を一緒にしてみたいね」という。名蔵には、台湾、とくにその中部からきた人たちが住んでいて、その拝所を使つて年一回、石垣市で俗に「豚祭り」とよばれている土地公祭を、中国的なやり方で実行しているのである。もちろん、私もみたいし、中国にくわしい直江君と一緒になら、こんな有難いことはない。ぜひやろうと同意はしたものの、ついにその機会に恵まれることなく、直江君は私を残して逝ってしまった。残念でもあり、この上もなく寂しい。

思えば、直江君とはもう五十年に近いおつきあいになる。私は、一九四二年夏から、当時東京大塚の茗荷谷にあった外務省の外部団体の東方文化学院に務めていたが、東京教育大学が近くにあって、時折私の研究室に立寄つて下さった。そんな折には、よく北京での話をしたり、直江君が北京で入手した資料を頂いたりしていた。私が中国と沖縄県地方のカマド神との関係を調べだすと、貴重な「竈君宝巻」のコピーをわざわざ持参し、私を激励して下さいましたが、同書はいまなお私の研究を助けてくれている。そんな関係で、一九五〇年、有志を集めて日本道教学会を組織した際には、本部委員（のちの理事）をお願いし、運営に加わって頂いたが、直江君は

※東京大学名誉教授

元来寡黙な性質で、理事会でもほとんど発言がない。この点は国立民族学研究所の評議員会でもまったく同様だった。ただ、昨年か一昨年かの日本道教学会の理事会の散会後に、窪さん、これからは理事会でも思ったことをいいますよといっておられたが、実はそれが最後の出席となってしまった。

性温厚とっていい直江君が、一度だけ、カンカンに怒ったことがある。慶応大学で日本民俗学会の年次大会があったとき、散会后帰りかけると、後方から呼び止められた。そして、直江先生をお願いしますという。簡単に引受けて歩きだすと、様子がおかしい。平素の直江君と全然違う。そして、私は理事をやめるといい出した。これはいけないと思って新宿にでてとある店に入り、話を聞くと、平素無口で穏やかな直江君の口から、烈しい言葉が次々と飛び出す。これには私も度胆をぬかれ、馴々と話をきいてから、相当の時間をかけて説得し、ようやく懺意してもらったことがあったが、直江君も随分烈しいところのある人だと、そのときつくづく見直したものである。このくわしいことは、ある人の人格にも関することなので、この辺で止めておこう。

直江君とは、九学会の他に、調査に同行したことが三度ある。一度は、韓国、台湾、香港へいったとき、あと二回はマレーシアやシンガポールにいったときであるが、この前後三回に及ぶ調査の際、直江君はいつでも私に好意的で、私のためにいように計らってくれた。韓国では、直江君はかなりくわしかったので、調査団一同つねに直江君に助けられ、

よい成果をあげることができた。ある晩、ソウルで団員のひとりが酒を飲みすぎて、とんだ酔態を示めた。当時韓国人々は、今日以上に日本人に対して好意的でなかったので、責任者の立場に立たされていた私は、周囲にいる韓国人たちの反応を大変気遣って、その団員を叱るが一向に応えない。あたりを見廻すと、人々は笑っているのでホッと安心はしたものの、もしものことがあることを恐れて匆匆に引上げた。翌朝早く、ホテルの私の室をノックする人間がいる。ふしぎに思って扉を開けると、昨夜とんだ酔態を晒した団員が、廊下に土下座している。きくと、直江先生から注意をうけてお詫びにきたといった。

また、シンガポールでは、ミーティングの際に一団員が私に対して失礼な言動をとった。すると、直江君はすぐにその態度をとがめて、私に詫びをいえとってその場を取りなしてくれた。このように、直江君はつねに私に好意的に振舞って下さった。だから私も、つねに直江君を頼りにし、金子量重が道教についての対談を企画し、私にその相手を尋ねてきたときには、躊躇することなく直ちに直江君の名をあげたが、その内容は『日本とアジア—生活と造形—第一巻、民族と信仰』（一九八七年、学生社刊）として、公刊されて残っている。

そんなように私のために配慮して下さった直江君は、いまはない。ノンビリした性格だったから、もっと人生をノンビリと楽しんで過ごしても良かっただろうに。その点だけは少々急ぎすぎたようである。どうか、あの世でゆっくりとして頂きたい。

直江廣治先生を偲ぶ

湯川 洋司

そこにどういふ先生方がいらっしやるのかは知ろうともせず、ただ民俗学に憧れて、私

は東京教育大学文学部史学方法論教室に入学した。教育大は小さな大学で、史学方法論教室もまた入学定員5名という小世帯で家庭的な雰囲気は漂うなか、先輩たちとの談話を通じて民俗学や考古学の学問的世界に自ずと導かれるという趣があった。また一般教育と専門教育の制度的区別がなく、卒業までにどちらも必要単位を揃えればよいという緩やかな仕組みになっていたから、入学時から民俗学の専門講義を聴くことができた。

しかし入学時にもっとも心躍らせて出席したのは直江先生が一般教育科目として担当されていた「史学方法論（民俗学）」であった。小脇にノートや資料を軽く挟みこむようにして教室に入って来られると、教卓前の椅子に腰を下ろし、おもむろにノートをゆっくりとした口調で読み始める。それを学生はノートに筆記するという、まさに大学が特別な位置付けにあった時代を偲ばせるような講義形式であったのだが、私は当初その形式が飲み込めず、随分とゆっくり話すものだと思いがら要点をメモするという態度であった。ときどき思い出したように立上って、学生には意味のつかみにくいことばを黒板に書き説明を加えるくらいで、だいたい座ったまま通された。

私はゆっくりと話されるそのリズムのなかで、次にどんなことばが先生の口から漏れてくるのか予測しながら聞いていたのだが、その予測が当たることはまれで、むしろ意外なことばが出てきて驚くことが多かった。そこに民俗学的なものの見方や考え方が常識的な見方とはやや違ったところから発しているような感じを受けました。

そうして講義を終えると、先生は来られたときと同様の姿勢で研究室に戻って行かれるが、そのどこかベタベタという感じを与える歩きぶりが長身の姿と重なって脳裏に焼き付いている。西洋史教室と境をなすように廊下が一段低くなった脇にあった先生の研究室の

たはずまいとともに、いまでもときどき思い出すことがある。

先生の学問は重出立証法という方法を正しく実行したところに大きな特色があるように思える。『屋敷神の研究』はその成果であるが、学問的態度としては性急に結論を求めない慎重さがあつたように思う。それを私は民俗学実習で示された聞き書きの態度から感じ取ったのだが、また釣りを趣味とされて、長期滞在のフィールドでは4日ほど調査をしたら1日休むのがよいと言われたことがあつた。それを真似るべく努力したこともあつたが、滞在1日に○×円の身銭をはたしていると思うと、ケチくさい話だが、なかなか休むことはできなかった。

筑波大学に移られてから、大学院生たちが中心になって長期間継続した新潟県山北町の民俗調査がまだ実習として行われていたときのこと、先生は宿舎のお寺をショルダーバッグを肩にすると、あのベタベタとした歩きぶりでどこかに出かけられる。おそらくそれはいつもの調査姿勢と変わりなかったのだろうが、あたかも風の如く行くという風情があり、その姿勢を我がものにしたいとひそかに思ったことがある。その宿では柿を学生に食わせる茶目つけも發揮されたが、一方では学生に命じて手折させた野花を宿の奥さんへ土産として持ち帰るロマンス的一面も示された。

その後、1979年の春に、松本浩一氏と一緒に台湾へ3週間ほど出かけたときに、行く先々に直江先生のことが話題に上つたことがあつた。東洋史から出発して中国に滞在しながら鍛えた中国語を駆使されて調査に従う先生をたたえる声もあつた。それはいまでは常識的な態度なのだろうが、当時は必ずしもそうではなかったのだろう。

その旅の途次、私はある地方で湯さんという人に出会い、戦時中は私と同じ湯川という姓を名乗っていたと聞かされたことがあつた。それが皇民化政策の一環であつたことをその

ときは深く理解していたわけではなかったが、戦時下における高砂義勇隊の存在と戦後における軍事郵便貯金の支払い問題がなお未解決であることなどの日台関係史を思うとき、台湾において多くの人びとから敬愛をもって迎えられていた先生の人柄と学問的態度とが今更ながらに貴く思われる。

古稀を祝う会で、挨拶に立たれた先生が、幸い健康で長生きしそうですと語り、参会者の笑みを誘つたことがつい昨日のこのように思い出される。はたしてそのことば通りになったとは言い切れないが、眼に抱えていた不安を意識しながらも学問と教育の道を悠然として歩まれていたように見えた姿を、今後の自分の進むべき道標ともしたいとしきりに思ういま、先生のことが懐かしい。

(山口大学教養部助教授)

直江先生と歩いた浙江省の村々

鈴木 満男

1 華南民俗調査の哀歓

平成元年から三年まで、つづけて三年間。私は直江先生と一緒に福建省と浙江省の村々を歩いた。毎年ほぼ一ヶ月の民俗調査だった。一最初の年は福建省を、後の二年は浙江省を。福建省の調査はひどかった。惨憺たるものだった。それに、冬の雨が毎日のようだった。「南国福建」のイメージは私の脳裏から跡形もなくなった。

廈門^{アモイ}大学とは謝礼のことで揉めに揉めた。

「内憂外患」こもごも至る。調査団の内部でも、若い団員のなかに我々「老頭児」(lao-tour)とは常識のまるで違う“異星人”がいて、その“造反”に遭つたりもした。

それに比べれば、浙江省の調査は、まず大成功だったと言えよう。だがその場合でも、世話してもらった杭州大学との間に、謝礼の金額をめぐる、相当にきびしい折衝が必要

だった。

「有金残さずキリキリ出しやがれ！」というの、子供の時講談本で読み覚えた山賊の科白せりふである。が、まずはそういった調子だった。

—そのような場合々々に、直江先生がいてくださったことが、どれほど団長の私を支えたことだろう。先生とは、たいてい毎晩同じ部屋に泊まった。やっかいな問題の起るごとに、私が詳しく状況を説明し、対策を相談する。先生のおだやかな対応が、私には大きな慰めだった。

*

面白いのは、しかし、その後の中国がわの対応である。

あれほど厳しく、むしろ“えげつなく”懲はたったにもかかわらず、その後の彼らはあたかも「光風霽月」の心境(!)であるかに思われた。年賀状を忘れずにくれるのは無論のこと。何か本を出せば、それをきっと送ってくれる。個人的な相談を持ちかける人さえある。

—といった調子である。

杭州大学がわのひとり、我々を最も容赦なく懲はたろうとした人物が、或る日こういうことを言った。

「北京の日本学研究中心(彼はその兼任だった)で見ていると、日本人の学者というのはトコトン喧嘩をするね。おたがい一流の研究者のつもりだから、一旦喧嘩をはじめると、もうどうしようもない。会っても口もきかないよ。その後あの人たちはどうするのだろう」。

「では中国人は？」と私。

「絶交までは決してゆかない。“つないで”おきますよ。—で、チャンスがあれば適当に仲直りする……」。

参った!

「清濁あわせ呑む」というのは、この事か。

政変常なく、昨日の権力者が何どき窮地に陥らぬものでもない、これまでの中国社会だ。一筋つないであれば、敢て平身低頭しても命

の助かる路があろう。

清濁あわせ呑む—というのは、「呑んだ」後忘れてしまう事ではないらしい。かえって執念深く覚えている。“収支決算帳”にチャンとつけておくのであろう。喧嘩する時使うという「算帳」(suan-zhang)という言い回し。その元がこれだ。

—であるならば、厦門大学にしても杭州大学にしても、我々をとことん痛めつけたという自覚は無いのだろう。二千年来、官僚の“byzantine corruption”で有名なお国柄でもある。

この私自身にしてからが、近ごろは“旧怨”を忘れはじめている。

とにかく、彼らが相手をしてくれた事によって、私どもも、福建省と浙江省と、普通ではとても行かれそうにない奥地にまでも足を踏み入れて、あれこれ見て来られたのだ……なぞと理由をつけて。

それだけではない。二冊の民俗研究が浙江人民出版社から出た。

『福建民俗研究』と『浙江民俗研究』がそれである。(しかし特別に高い原稿料をはらった人物—現在、省の高官である—の寄稿はなかった)。(読者に：これらの本はまだ残部があります。お読みになりたい方は私まで御連絡ください。ただし中文です)。

前者はともかく、後者は、もう我々が来ることはない、向うにはっきりと分って後の出版である。“猫ばば”をしようと思えばできたのだ。にもかかわらず—大分遅れて、私が半ば諦めかけた時分に—送られてきた。

中国には、やはりそれなりの“Pacta sunt servanda”の伝統があるのだろう。

2 浦江

浙江省調査の最初の年は、浙江省の北～西部を見てまわった。

私と直江先生は、広く全般的に民俗を見て

まわろう、そういう計画を立てた。そして杭州を出発、富春江—錢塘江の中流—を上流へと遡っていった（鈴木満男「鰻魚佬—富春江で出会った水上民」）。しかし若い団員二名には、村へ住み込んでもらった。その場所は湖州—善連鎮—と諸暨である。あらかじめ準備した「中国民俗調査項目」を渡した。それに従って、とにかく挙げてある全ての項目について聞いてくれた筈である。

さて二年目—。

我々老頭兎も今度は村に住み込むことにした。たまたま出会った民俗を摘み食いするだけでは、やはり腹がくちくならぬ。前の年の経験で、それを痛切に感じていた。

そのようにして私と直江先生が入ったのが、金華地域の浦江縣であった。

金華の名前は、我々の調査の最初から私の頭にあった。Wolfram Eberhard が、戦前、1930年代に金華を訪ね、魅力的な報告を残していたからに他ならぬ。

Eberhard が、その時特に注意したのが「クスノキのお母さん（樟樹娘娘）」の信仰だった。

だから、現地に行ってみて、巨大な樟樹を見いだした時の嬉しさといったらなかった！我々の行くのを半世紀以上も待っていてくれた勘定だから（鈴木満男『環東シナ海の古代儀礼』第3章「巨樹の時代—その終焉」）。

—その場所は楊田村。すばらしい晩秋の好晴の午後だった。村人は打ち揃って刈り取ったばかりの稲を干すのに余念がなかった。

午後も遅くなってから、もうひとつの候補地である鄭宅鎮を訪ねた。ごみごみした町のなかに鄭一族の宗祠があった。古びた内部はもう夕影が濃い。陰気な感じなのである。ここで3週間も調査するのは、どうも気が進まなかった。

その晩、宿でアマダクジを引いた。結果は、私が鄭宅鎮に当たった。明るい楊田村は直江先生が“取った”。神意とあらば止むを得ぬ。

翌日から、朝の九時ごろホテルを出る。公用車が待っている。半時間ほどで鄭宅鎮に着く。さっそく前日の聞き取りの再検討に取りかかる。

聞いた中で、意味のはっきりしない箇所を質す。宿舎で資料整理しながら気のついた、関連事項を尋ねて理解を深める、資料に奥手を与えて“立体化”する・・・。

昼飯は村の人々が輪番に、競争のようにして御馳走を用意してくれた。

肉が多い。牛、水牛、豚、鶏、魚、時に犬—といった各種の肉。それがあまり手を加えないままで皿に盛り上げてある。野菜が欲しいのに、それはごく少ない。—それが客人を迎える時の禮儀だそう。

—午後は三時ころまで。時には昼食後、話に出てくる鄭宅鎮内部の名所旧跡を、時には足を伸ばして由緒ある山や谷を、探訪することもあった。緊張した聞き取り作業からいつとき解放されて、またとない息抜きになる。大いに楽しみにしたものである。

「民俗調査項目」を漏れなく調べあげることは、団員みんなの義務だった。怠けては行われなかった。「あと何日？」が頭から離れることはなかった。

直江先生の分はといえば、どうも通訳が良くなかった様子だ。我々の質問が、分かり切ったこと、つまらぬことに思えたのだろう。気を入れて聞かないらしい。大学の講師クラスの横着な男だった。日本語は達者だったが。

直江先生がもっと強く要求すべきだったのかも知れぬ。が、先生の人柄では、それはちよいと難しかっただろう。

私の方は、新婚ほやほやの女性で、よく協力してくれた。その蘆京麗さんは、日本語もよくできたが、特に有難かったのは、隣りの縣—東陽縣—の生まれで、浦江縣の方言がよく分かったことである。

—日本では想像もつくまいが、浙江省の方

言はひどい。その前の年、^{しよま}諸暨に行った時のことだ(鈴木満男『柳田・折口以後』第四章「よみがえる西施」)。

諸暨の文物の展示室があって、縣の文化関係の人が案内してくれた。その言葉が、私にはまったく聞き取れないのである。すこし聞きにくい、という程度ではない。

あとで同行した通訳さんに尋ねてみた。なんと「私にもまったく聞き取れぬ」というのではないか。彼は紹興の出身。紹興と諸暨との距離は、汽車で1～2時間に過ぎぬ。

杭州大学では、通訳にたいいて一人は、調査地か、もしくはその付近出身の人を選んでくれた。付き添いの職員も、できれば現地出身の人が来てくれた。それは大変に重要なことだったのである。(ちなみに、福建省は「普通話」が普及しているのが有名である。浙江省のような問題は、そこでは起らないと思う。)

3 黄昏

戦い終って日が暮れて一。

ホテルでの夕食後は、直江先生と散歩に出た。かならず毎晩。

浦江縣の縣都であるが、さして大きな町ではない。浦陽といった。

隅から隅まで。と言ってよい程よく歩きまわったと思う。古い一清朝末期の様式らしい一低い二階建の木造家屋の立て連なる町だった。すこぶる趣きのある、昔の「支那の町」だった。

葡萄酒を^{みかん}買う。橘子^{みかん}を買う。一ホテルに戻ってから、直江先生とそれらを飲みつ喰いつしながら、雑談やら相談やら。

あの頃、先生は問題なく健康であった。歩くにもほとんど問題はなかった。

我々は一緒に、秀麗な仙華山の中腹まで登った。そこには“山の女神”の廟があった。若い美人の山の神が、ふところに可愛い赤ん坊を抱いていた。

別の時には、有名な永康の方岩にも登った。

切り立ったような巨巖である。かつては毎年8月15日に、成年式として登山が行われていた、そう推定される山である。

中国調査の常で、たびたび現地の役人との宴会がある。まず彼らが歓迎の宴を開いてくれる。その後、我々がお返し^{へんたい}の宴を用意する……。そんな時、酒を飲む、料理を食うという点では、私は到底先生^{せんせい}の敵ではなかった。驚くほど健啖^{けんたん}であった。

—どんな物が出てきても、平気で召しあがる。

「では頂いてみましょうかな」と、例のゆったりした口調で言いながら。

犬の肉などでも、何度も箸^{あじみ}を出される。私といえば、一度の味見^{あじみ}でもう十分なのだ。

*

あのように健康に見えた直江先生が、こうも早く亡くなられようとは。

先生のお言葉を最後に聞いたのは、電話であった。イェール大学の人類学部に行くことが決まった時だ。たいそう喜んで、わざわざ山口までお電話をくださったのである。

イェールの一年は、実に実りの多いものだった。だが、先生にアメリカの土産話もせずじまいだった。ろくに休む間もなく、ひきつづき一年間、ソウル大学校に赴任せねばならなかったから。一山口のような遠方に住むと、気軽に友人・知人を訪問できないのが何とも不便である。

よく北京語を話す、悠揚せまらざる風格の学者。

お仕事も、そうガツガツと一腹のへったように一は、なざらぬ。

戦後育ちの若い団員などは「直江先生は空気がたいで、頼りがない」などと失礼な感想を述べていた。多分、彼らの生い育った慌しい、せせこましい、戦後日本の社会環境では、到底出てきそうにない人物だったと思う。だから、その値打ちを十分に評価する物差しを、

彼らははなから持ち合せていないのだろう。先生のゆったりとした趣きの幾分かは、戦前の優雅な北京—毛澤東があつた城壁を打ちこわす以前だ—で、青春の数年間を暮したことが影響しているのかも知れぬ。

黄昏は人生の晩年だ。やがて間違いなく夜が来る。が、その直前の、一日で最も美しい時刻だ。

そういう詩を、私の通訳の蘆京麗さんが教えてくれた。彼女の大好きな詩であるということだった。

その日の仕事を無事に終えて、もう暗やみに沈みかけている浦陽の町から、ゆっくりとホテルの立つ岡の高みに登ってくる時だった。

あれは特別によく晴れた一日だったろうか。あたりには言いようもなく見事な、むしろ荘厳な、黄金の黄昏の光が満ちていた。

その場所に直江先生がいたかどうか、記憶が定かでない。だが、先生の亡くなったことを—迂闊にも—『比較民俗研究』で初めて知った時、まず私の脳裏に浮かんだのは、あの日の美しい黄昏であった。(平成6年6月25日、ソウル市冠岳區にて)

(ソウル大学校法科大学招聘教授)

随想「先生の人と学問」

胡桃沢 勸司

直江先生が「人生80年」の時代にこんなに早く亡くなられるというのはおよそ想像すら出来ないことだった。私が御指導いただいたのは言わば先生の晩年の時期であるが、与えられた機会に思い出を自分なりに綴っておきたいと思う。

編集部からのタイトルには一寸合わない話かも知れないが、私の先生に対する印象を一言で言えば「どこまでも自分の学生を気にか

けてくださる教育者」というものである。そして、情けないことではあるが、実際先生に何かとお世話をいただいている間はどれもこれが良く解っていなかったような気がする。先生に色々と御心配や御厄介をおかけしたのはそれなりに承知していたつもりだが、それを身をもって実感したのはやはり自分自身が教師としてゼミを持つようになってからだろう。この職に就いている者は誰でもそう思うのだろうが、学生というものは想像していたよりはるかに世話が焼ける。単に勉学の指導をするだけでは済まないからである。例としてはおよそ好ましいものではないが、この4月、私のゼミの4年生がバイクに乗っていて交通事故に巻き込まれてしまった。彼の父君から研究室へ知らせの電話を戴いた時は一瞬血の気が引くのを覚えたものである。その後の電話で大丈夫と聞かされてはいたが、次の休日私は彼を見舞いに行った。正直なところ顔を見なければ安心出来なかったからである。そして、病院へ向かう道すがら、私はほんの三月程前に亡くなられた直江先生の事を思い出していた。というのは、筑波に在学時代、左足アキレス腱を切って高田の馬場の病院に入院していた折、先生がわざわざ見舞って下さったからである。あの時は大学院の仲間達が入れ替わり立ち替わり見舞いに来てくれ、お陰様で退屈しなかったが、正直なところ先生が自らお出で下さるなど想像すらしていなかった。椅子に座られることも無い程の短時間の御来院だったが、激励の言葉をかけて下さり、「本は読めるだろう」と当時発行間もない『祭と年中行事』にサインをして病床に置いて下さった。その時はすぐお帰りになるほど忙しいなかを来て下さったことがただ嬉しかったのだが、そこまで下さったのは、今になって我が身に照らして考えてみると、先生も「顔を見なければ」の心境だったのではないかと思えてならないのである。退院後、お礼の電話をかけたところ、如何にもホッとし

北京で直江先生を偲ぶ

平山 和彦

たという口調で喜んで下さったのが鮮明に甦ってくるのがこの思いを強くする。自分のゼミの学生が入院騒ぎになるなど、二度とあっては欲しくないが、この経験を通じて「先生に御心配をおかけした」のがどういうことだったのか、自分の学生を抱えるというのがどれほど心労の多い事であるのか、始めて解ったような気がするのである。

先生は、日常的には学生に細かいことをあれこれ言われることは決して無かった。先生のことが良く解らないうちは、学生に関心が無いのだろうか、とすら思えたほどである。そうでないのは前述のことで明らかなのだが、要は学生指導の急所を良く心得ておられたということだろう。周知のとおり、昨今世間の大学に対する風当たりはかなり厳しいものとなっているが、そのポイントの一つに「研究者としては優れていても教育者としてはどうも・・・」という教員の存在が挙げられることがある。私自身、教育と研究の間で右往左往する日々の連続であるが、学生にどう対処してゆくか、身をもって一つの手本を示して下さったのは先生だと言って良い。「普段はどこまでもこちらの好きなようにやらせてくださるが、いざ困った時はすぐに助け船を出して下さる。ただ、物静かなだけにその存在は良い意味で恐い。」これが先生が多くの教え子達から慕われた要因ではなからうか。これを手掛かりとして、これから自分自身のスタイルを編み出して行かなくてはならないのだが、行き詰まった時、もはや先生の御指導を仰ぐことが出来ないのは何とも悔しい。

こんなことを言うと、「何時までも僕を頼っていないで、もう自分で考えたまえ。」という例の先生独特の声が聞こえてきそうである。民俗学的に言えば、そうすることが正に先生に対する何よりの供養になるということなのだろう。

(近畿大学文芸学部助教授)

今年の7月、私は縁あって北京を訪れる機会をもった。北京の民俗学関係者に合うことが目的であったが中国の民俗について少しでも知識を仕入れようと、出発前のあわただしい中で、一夜づけのように直江先生の『中国の民俗学』を拾い読みしたのである。

当書に出てくる地名で、いちばん北京に近いところといえば、北京東郊の六里屯という集落であろう。先生はそこへ1941(昭和16)年以後たびたび調査に訪れたということである。しかし、かつては北京郊外であった当地も、今日では北京市内にくみこまれたようである。私はその近くまではいかなかったけれど、北京北方の空港や西方の万里の長城へタクシーで向かう途中で農村を垣間見たおりに、直江先生が調査に通われたかつての六里屯という集落もこんなものではなかったか、とはるかに思いを馳せたのであった。

1970年前後から、先生は韓国を始め台湾、香港、マレーシアなどに民俗調査に赴かれたが、青年時代を過ごされた、先生にとってはきわめて思い出深いはずの中国にはついに行かれることはなかったようである。恐らくおりからの文化大革命のために、中国に入国することさえかなわなかったに違いない。先生はさぞかし無念であられただろうし、私としても残念でならない。しかし、もし先生が今日の中国に行かれて、今では都市化した六里屯を見られたら、それはそれで残念に思われるのではないだろうか。たとえ政策上の都市化ということがなかったとしても、おそらく社会経済的な発展によって北京は今日のように拡大し、大きく変貌をとげたに違いないが、いずれにしても、往年の北京をまったく知らない私でさえ驚くような北京のたたずまいなのである。

ところで私が北京で会った満州族出身の女性研究者は、直江先生の風貌にそっくりで、驚くとともに懐かしささえ感じたことであった。古代か中世のころに、満州族が日本海を渡って東北に移住したことは充分にありうることである。今のところ推測でしかないが、青森県の八戸がご出身地である先生の血には、もしかすると満州族の血が流れているのかもしれない。先生の大陸的な性格は、青年期を中国で過ごされたからだけではなく、あるいはそうした淵源によるものかも知れない、などとそんなことも私は北京で考えたのであった。こうした珍説も含めて、私の北京体験を先生にお話したかったのだが……

(筑波大学歴史・人類学系教授)

直江先生に学んだこと

鈴木 正崇

直江先生と一緒にフィールドワークをしたのは、一九八九年一月から二月にかけての福建省と江蘇省の漢族を訪ねる旅が最初で最後だった。福建省では厦門から泉州を経て、福州へ、そして武夷山へというオーソドックスな行程で、江蘇省では蘇州で春節を見て歩いた。中国では水を得た魚のように自由に動き、闊達な中国語を操りながら歩かれていたのが印象的であった。あの開放的なトイレに入り、用をたしながら隣の人と話しをする。農家では何気なく中に入り、何時の間にかお茶やご馳走が出てくる。人々の中に溶け込むように入っていく巧みさには、つくづく感嘆させられた。フィールドワークは緻密で相手が知らず知らずに引き込まれていく。そこには穏やかで温厚な性格がよく現われていて、いつもかくありたいという目標であった。時折お話になる戦前の北京での生活や、山東省・山西省での民俗調査の様子をお聞きしながら、良き原点を持っていることの必要性をつくづく

感じさせた。現在は大きく変化しているだけに、聞き逃せない話が多く、沢山のことを学ばせて戴いた。総じて、理論家というよりは、事実に即して語る方で、論文に書かれない細かな体験が止めどなく現われてくるのが印象的であった。中国では「大人」という悠々迫らず普通の人の生き方を超越したような暮らしをするスケールの大きい人を見かけるが、その名に相応しい方だったと思っている。

学风は各地域社会の研究よりも、個別の文化要素に注目することが多く、この点では師の柳田國男の影響が強く見られたが、調査と文献を程よく調和させて、いつも日本と中国の比較の観点が生きていて、どこかに相対的な眼を残していたことが印象的であった。特に民間伝承への関心が強く、異類婚姻譚や七夕説話などを日本の昔話と比べて類似性を説かれたが、あくまでも個々の国や地域での変化の歴史を把握した上での比較を提唱する。日本では屋敷神について大著『屋敷神の研究』を纏められたが、私にとっては備後や備中の荒神信仰を考えていく時に、その論点は参考になった。その後、都市研究への関心も高まるが、それには北京での生活の影響があったと見られ、都市を農村の延長拡大として、個々の年中行事を農耕儀礼と対照させて社会の成り立ちの違いに注目して考察した。しかし、その本領は中国の民俗研究にあったと思われる。特に、農村に対する見方がユニークで、村落を訪れる薬売り・鉄匠（鍛冶屋）・説書師（講釈師）・風水先生・善書語りなどを伝承運搬者として把握し、村落が外と繋がりを持続する開放的性格があるという指摘が面白かった。また黎明期にあった中国民俗学を丹念に検討する作業も行なっており、その成果を生かしての比較民俗学成立への期待を表明する。『中国の民俗学』や『民間信仰の比較研究』は、比較に慎重であった日本民俗学の立場からの本格的な中国研究で、長く空白が続いた日中の民俗、特に大陸との比較について

の先駆的業績として後続の研究に大きな影響を与えたように思う。

第二次世界大戦を挟み、新中国の成立、そして激動の文化大革命を経るとい中国の大変貌は想像を絶するものであったが、戦前の体験を持ち、変化の成り行きを見つめて来られた直江先生には、今日のような時期にこそ大きな活躍をする場があったのにと悔やまれる。日中の交流が現在のように頻繁に行なわれる時代になることは、ご本人にも予想出来なかったと思う。民俗の比較研究は簡単ではなく、地道な記録の積み上げが必要であるが、まさにその先駆者であり、謙虚で緻密な調査者としての直江先生の姿勢に多くのことを学ばせて頂いた。先生のご冥福をここからお祈り申し上げたい。

(慶応義塾大学文学部助教授)

断想

佐野 賢治

入学した東京教育大学史学方法論教室は民俗学と考古学からなる一学年、定員五名の小さな教室であった。学園紛争や筑波移転問題で学内全体が騒然とし、また、疲労感が漂っている気配を入学当初は感じていた。民俗学専攻志望は今では天理大学に勤めている飯島吉晴氏と私の二名。上級生の出席も少なく、一年次から金子エリカ先生の文化人類学の講義など、わずか数名で、それも板書はすべて英語というような講義の山の中に入っていた。魅力ある講義の中でも直江先生の民俗学概論、国分直一先生の外書講読の時間は専攻ということもあって待ち遠しかった。ゆっくりと講義ノートを学生が写しとるスピードで話される。民俗学という内容、階段教室という場が合さって困窮裏端で古老の話をしている風情であった。一方、国分先生はソイナーの『家畜化の起源』の学生の翻訳に情熱的な解説を

加えられていた。

温厚な直江先生にその講義の事でひどく叱られたことがあった。それは民俗学調査法という講義に現在のなまた、実務的な内容も取入れて欲しいといったレポートを提出したところ、何かの集まりの時厳しく注意された。国分先生や当時助手をされていた宮田登先生がその場をとりなしてくれたが、直江先生が何に対して怒られたのかよく分からないまま、その講義は翌年から開講されなくなってしまった。その理由を何時か聞いてみたいと思っていたがそれも叶わなくなってしまった。毎年秋の民俗学実習は調査はもとより学部学生、院生、教官の懇親の場にもなっていた。宴会では中国語で草原情歌などをよく披露されていた。直江先生は何よりも和というものを大切にしているなということが学生の私にもよくわかった。その後、中国と深い関係を持つ愛知大学に就任が決まったときには我が事のように喜んでくれた。中国の民俗調査が大陸の政治事情もあり不可能な中、台湾調査やエバーハルトの著作の精読で将来に備えていた先生であった。ある年、新入院生の古家信平氏がエバーハルトの外書講読の時、そのテキストを前年も取り上げたことを指摘した。先生は少しも動せず「古家君これは何度やっても良い本です」と悠然と答えていた。1985年の夏、北京に滞在中の私は、先生を団長とし、松下智氏や三河民俗談話会の一行を中心とした茶の調査団に合流し、福建省の武夷山周辺を歩いたが、その健脚ぶりや、アモイ市内の夜店での健啖家ぶりには驚かされた。帰国後、愛知大学での日中シンポジウムの折り、これから中国調査が存分に出来る時代になったと喜んでいたが、その時参加の北京師範大学の張紫農先生も鬼籍に入られてしまった。比較民俗研究が年々盛んになりつつある現在、その井戸を掘った先生を失ったことは寂しい限りである。

(筑波大学歴史・人類学系助教授)